

## 事例報告3

マナーキッズ®プロジェクトを媒介とした小学校体育と道徳の融合授業の事例報告

### 道徳授業(総合学習)の中に「マナー教室」を取り込んでみて

おじぎ・あいさつ・食事のマナーを中心に

報告者 青森県八戸市立新井田小学校

教諭 藤原 公浩

1. ねらい 今、世界の中で、日本の礼儀作法が注目されているという。それは、常に相手を

意識したものであり、思いやりと気遣いにあふれているからである。しかし、日本では、生活の欧米化、核家族化、社会全体の教育力の低下が進み、われわれ日本人としての文化の源である美しい礼儀作法を失いつつあるのが現状である。今回、マナーキッズテニス教室体育授業の実施に伴い、日本の礼法の総師範でおられる鈴木万亀子先生を本校にお迎えすることができる絶好の機会をいただいた。

全学年において、道徳の授業の一環として、教室の中でのマナー・礼法教室を実施することにより、日本人が長い歴史の中で培ってきた、美しい礼儀作法の真髄に触れさせたいと考えた。

全学年で実施すること、めったにお会いすることのできないその分野の最高の方との出会いを大切にすることにより、本校の児童の心に一本、芯が通るのではないかと考えた。

2. 外部講師 小笠原流礼法 鈴木万亀子総師範

3. 日時 7月2日(月) 1年生(99名)・4年生(103名)  
7月3日(火) 2年生(98名)・3年生(113名)・5年生(112名)・6年生(108名)

各学年…45分間 マナーキッズ教室体育授業時に同時開催。

4. 授業内容

<各学年共通>

マナーの基本は、「自分がされていやなことは、人にしない」 迷惑をかけない

約束を守ること

人の話を聞くときは、相手の目を見て聞くこと(頭にインプットされる)

マナー(礼儀作法)は、相手に対する思いやり・優しさを表現すること  
例えば、背の高い人は、背の低い人を前にしてあげて、鑑賞する。

マナー(礼儀作法)は、相手に押し付けるものではない。

相手に恥をかかせないようにすることこそが最高のマナーである(6年)

人に思いやりをかけることができる人は、人からも思いやりをもらえる。  
(4年)

マナーは、一つ一つ覚えていけばいい

お話している人の方を見て聞く。話がしっかり頭に入る

一年生は、「小さい大人の仲間入り」(1年生)

10歳を過ぎるとなかなか直せない 小さいうちが大切

マナーを見ると、お父さん・お母さんがどんな人か、どんな躰をしているか分かる

美しい言葉を使いましょう(4年)

年上の人や目上の人には、丁寧な言い方をしましょう(4年)

和室以外では、目下・年下の者が目上の者を迎えるときは、必ず立って行うのが礼儀(6年)

集団であいさつする場合は、列の前からあいさつを言う。その後、後ろの人がそれに合わせてあいさつをする。(5年)

集団で列をそろえる場合は、奥の列からそろえる。(5年)

茶室以外では、畳の縁を踏んでもかまわない。誤解されている。(6年)

「家の敷居を踏んではいけない」のには訳がある。敷居を踏むくせをつけると、ゆがみが生じふすまのたてつけが悪くなるので、踏んではいけない。(6年)

上座と下座は、国際マナーでもあるからしっかり覚えておきなさい。(6年)

意地悪ばかりしていると、自分も周りも不幸になる。

友達の家遊びに行ったら、ごはんの時間にはよその家にはいけない

よい姿勢をすると…  
きる。

前頭葉の自己抑制機能が働き、よく考えることができる。

前向きな考え、行動ができる。

- ・ 足をそろえる
- ・ へその周りをかたくする

- ・ 胸をぐっと張る
- ・ あごを引き、頭を上から引っ張られる感じ
- ・ 手は指を閉じて、体の横に置く
  - よい姿勢をすれば、顔がいい顔になる
  - 腰の上が固くなると、脳がよく働き始める
  - 悪い姿勢をしていると、背中・腰・肩・内臓が悪くなる
- ・ あいさつは、優しい顔で、腰を折って、心を下げる
- ・ お辞儀をした後には、必ず相手の顔を見る 残心(ざんしん)

自分の心のリボンと相手の心のリボンを真ん中でしっかり結ぶこと

### 食事・給食

「いただきます」…感謝を表す

給食では、一斉に言うのがマナー みんなが食べ終わって「ごちそうさま」をそろえる

家では、一番年をとった人が箸を持つまで見て待つ

食べることは生きること、生きることは食べること 食べることによって体や脳が作られる。好き嫌いが多いと勉強も上手いかない。勉強も遊びもたっぷりできるように食事する。

#### (1) 座り方

女の子は、ひざをキュッとつける

男の子は、足の横幅分開いてもよい

背中をもたれさせない 姿勢をきれいにすることが一番大事

#### (2) 食事のマナー

正しく箸を持つとカチカチと音がならせる

汁物を先に食べる。箸の先にご飯がつかないようにするため

箸を持って振り回してはいけない

箸の先を相手に向けないようにする

箸を3センチ以上汚したら下品になる ぐわっと混ぜないようにする

おかずは、好きなものばかり食べない

昔の人は、おかずのことを「おまわり」と言った…おかずを回るように食べる

遠くの皿を箸で引っぱってきてはいけない

皿は手で持つ(しずくを落としてはいけないから) 持って・左手を添えて

お漬物は、少し残ったご飯といっしょに、最後にいただく

盛り付けてあるものは、上から順に食べる

食事中、髪の毛をいじってはいけない

皿は、大きな音を立てない

熱くても、フーフーしてはいけない

### (3) お話

人の悪口、いやなことは言わない 楽しいお話をしながらいただく

### (4) 好き嫌い

食事を残すことは、作ってくれた人に申し訳ないこと

食べ物、脳みそ、血になる大切なもの

同じものばかり食べていると、同じ夢しかみない。わがままな人になる。

### 学 習

- ・ 授業中におしゃべりをして遊んでいてはもったいない。隣の人にも迷惑。
- ・ おしゃべりしないで集中すれば、成績も上がる。

### その他

- ・ 人間だから、嫌なこともたくさんある。しかし、いいこともたくさんある。嫌なことを乗り越えていけば、いいことが必ずやってくる。(4年)

## 5. 授業を終えた教師の感想

### 授業の後、教師の意識・指導が変わった！

学年に応じて、また、子供たちの反応に応じて、お話の内容をしていただいた鈴木万亀子先生に感謝したい。ありがとうございました。子供の前に立っただけで、その場の空気が変わった。私もそんなプロの教師でありたいと思った。

給食のお盆・皿・器・牛乳・箸を使っの具体的な話は、分かりやすく説得力があり、子供の心と頭にすーっとしみ込んでいった。

改めて、自分(教師・大人)のマナーについて、目の前にいる子供のマナーについて考えるようになった。そして、今まで何でもないように感じていた自分や子供の行動・振る舞いに対して、「これでいいのかな?」「相手は不快ではないのかな?」と考えるようになった。

あいさつでは、「残心」・「心のリボンを結ぶ」を意識するようになった。

子どもの様子を見てすぐしかるのではなく、「マナーはどうか…?」、「迷惑をかけていないかな…?」、「自分がされたらどうか…?」というキーワードを子供に投げかけて、子供に考えさせるようになった。

自分自身も、「子供の前できちんとした振る舞いをしなくては」と意識するようになった。

全校児童が、鈴木万亀子先生のお話を聞いたので、全校一貫した指導ができるようになった。「鈴木万亀子先生に教えていただいた立ち方をしてごらん!」というだけで、638人の子供たちが、凜とした姿で立てるようになった。

子供をほめる場面が増えた。学級内にプラスのサイクルが増えた。

ほめる ほめられてうれしい もっとがんばろう(私もがんばろう) また、ほめる

マナー(礼儀)という視点で、子供を見つめ直すだけで、生活面、学習面の全ての領域を網羅することが分かった。そして、その波及効果も大きい。

外部講師を積極的に授業に取り入れてよかったと思う。鈴木万亀子先生には、日頃、子供に指導していることをしっかり裏付けていただいた。たくさんの方、その道のプロの方に言われることで、子供たちは納得もし、心に落ちていくのだと思う。

「マナーだから守りなさい」ではなく、「なぜそのようなマナー(礼儀)があるのか」を教えていくことが大切であることを教えていただいた。

子供の意識が変わった。そして、行動として表現できるようになった!

授業の始まりと終わりのあいさつでは、教師の目を見てのあいさつができるようになった。

「残心」・「心のリボン」を意識したあいさつをすると、その後の動きに違いが出てく

る。 落ち着いて次の行動に移ったり、次の準備をしてから休み時間に入ったりする姿が増えた。

朝食をしっかり食べるようになった。

道具や教室に置かれている物を大切にしようとする子が増えた。

全校朝会で立つ姿や話を聞く態度が明らかに立派になった。

鈴木万亀子先生が、直接話さなかったことも良くなった。例えば、机の上を整理整頓する姿、机をきちんとそろえようとする姿、お互いに譲り合う姿等に見られる。

地域や校内ですれ違うときのあいさつがとてもよい状態になった。明るい顔・場に合った声・腰の折り方等、本当によくなった。

学級内に落ち着き・けじめが感じられるようになった。

## 今後への課題・意見・感想

教師・子供だけでもこれだけの効果があったのだから、保護者へもお話していただく機会を設けることができると、さらに効果が上がると思う。何をしてもそうだが、子供・保護者(地域)・学校の一貫した教育が望ましい。

教育界では、「食育」が話題になっているが、マナーという視点からもせまるべきではないだろうか。

教育界には、依然として新しいものに対して閉鎖的なところがある。鈴木万亀子先生のような「その道の達人」の方々を外部講師として大いに活用していくべきだと感じた。

## 8 研究報告 1

### 「幼児期の言語発達に及ぼす模倣運動の影響」

筑波大学大学院人間総合科学研究科

運動生化学准教授 大森 肇

「幼稚園・小学校マナーキッズテニスプロジェクト」の極めて特徴的なコンセプトは、体育・徳育・知育のバランスを重視していることである。本講演では「知育」に焦点を当て、「幼児期の言語発達に及ぼす模倣運動の影響」に関する我々の研究\*を紹介したい。

スポーツの動きを学習するプロセスにおいて、手本となる技術を観察し模倣しながら上達していくことは必然である。しかしながら、この「模倣」という営みが運動学習という側面以外にも効果的であることが、近年における非侵襲的脳機能計測法の進歩により次第に明らかになってきた。

本研究では、言語発達の感受性期である幼児期において、模倣運動によるブローカ野（発語に関わる言語野）への慢性的刺激が言語表出の発達を促進するかどうかを検証した。まず成人男性を対象に、一過性の模倣運動によってブローカ野が活性化を示すかどうかについて、近年開発された光トポグラフィーを用いて測定した結果、ブローカ野を含む領域の活性化が確認された。次に、幼児を対象に慢性的な模倣運動介入を3ヶ月間実施し、言語検査に及ぼす影響を検討した結果、慢性的模倣運動介入により言語表出の発達が促進される可能性が示された。模倣検査得点と言語検査得点との間、ならびに模倣検査得点の変化と言語検査得点の変化との間には相関関係は認められなかった。これらの結果から、模倣運動スキルのレベルや上達の有無に関わらず、模倣運動すること自体が言語発達を促進する可能性が示唆された。

本研究は、幼児期における運動体験が身体的な発育・発達にとって重要であるばかりでなく、知能の発達にも重要であることを実証的に示している点で興味深い。

\*共同研究者：後藤悠生（茨城県立真壁高等学校）、杉浦崇夫（クリアサイト幼児運動指導研究会）、寺本 圭（木曜会テニスプロジェクト）、齋藤慎一（元筑波大学体育科学系）

## 9 研究報告 2

「マナーキッズテニス教室は子どもの感情を改善する」





